読者の「リアル」を大調査

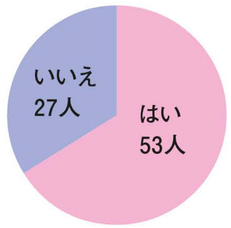
婦人公論 女性の生き方研究所 vol.11

お墓、どうしていますか?

創刊以来、〝女性の生き方研究〟を積み重ねてきた『婦人公論』。この連載では、読者のみなさんへのアンケートを通して、今を生きる女性たちの本音にせまります。今回は、お墓をめぐるアンケート。先祖代々の墓をどうするかは、悩ましい問題のようです

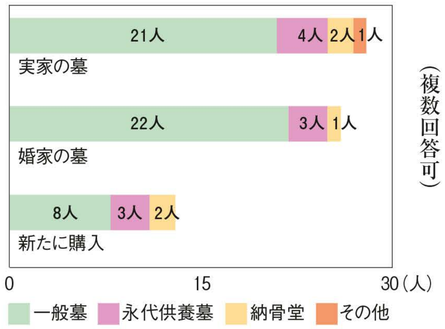
※2024年6月号の特集に寄せられた回答を紹介しています
回答者数80人　平均年齢▼64・53歳
回答者の内訳▼60代…30人　70代…24人　50代…16人　80代…4人　40代以下…6人

Q あなたが管理しているお墓はありますか?



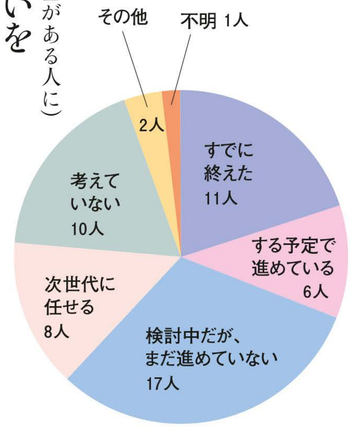
Q 管理しているお墓はどんな墓?

(複数回答可)



Q 墓じまいを検討していますか?

(管理する墓がある人に)



【すでに終えた】

●市営墓地で1年前に合葬墓地(永代供養)の募集があり、抽選に当たって、一般墓から移しました。2人いる子どもは結婚する予定がありません。将来管理する人がいなくなると不安に思っていたので、タイミングが良かったです。費用は全部で100万円弱。お墓の解体費用も込みでした

(66歳・会社員)

【する予定で進めている】

●日本海を望む小さな漁村に夫の実家の墓があります。当初、私たち夫婦はそのお墓に入るつもりでしたが、飛行機、レンタカーを乗り継いで7〜8時間と、その地に行くだけで一苦労。ある時、実家の菩提寺から集合墓を作ったと連絡がありました。そこでわが家も数年のうちに義父母の墓じまいをし、集合墓に移してもらうことになりました

(76歳・専業主婦)

【検討中だが、まだ進めていない】

●「夫の家の墓に入るのが当たり前」と夫は考えているが、私の本心は「墓じまいをして、自分たちの墓はいらない」。でも夫に、あなたの親の墓じまいをしたいとは言いにくい。さらに存命の親戚の反応が怖くて、今は私が考えているだけです

(62歳・専業主婦)

●両親の墓は一人娘の私が管理していましたが、夫の両親のお骨を一緒に入れ、両家墓にしました。昨年夫が亡くなり、長男も養子に行ってしまったため、今後、後継者がいなくなります。霊園の合同墓にしたいけれど、見積もりを出してもらったら、なんと300万円。どうするか考え中です

(77歳・専業主婦)

【次世代に任せる】

●結婚3年目、実家の父に良い場所があれば早いうちにお墓を買ったほうがいいと言われました。いろいろ考えて、夫の兄の隣の区画を購入。娘には、私の死後墓じまいしてほしいと伝えてあります

(88歳・年金受給者)

●私が死んだら長男が墓の管理をすることになるでしょう。長男は県外で生活しているので、墓じまいするかどうかは、本人の判断に任せます

(76歳・年金受給者)

【考えていない】

●私の代までは頑張って管理をしようと思います。子どもがいないためどうなるかわかりませんが、今は母の介護で手一杯。おいおい考えていくつもりです

(62歳・無職)

Q 現在、お墓に関して困っていることは?

●墓の話を嫌がる夫を説得して購入を進めるのが大変である。そのくせマンション型は隣とくっついているのが嫌だ、土の上がいい……など難癖ばかりつけてくる。死後購入だとお金がかかるので、生前に決めておきたいのに

(69歳・パート)

●実母が永代供養墓に眠っている。自分も同じお寺の永代供養にしたいが、お坊さんの性格やお寺の経営方針がなんとなく嫌で迷い中

(58歳・専業主婦)

●今34歳の独身長男が、墓を守れるか不安。将来墓じまいする費用も渡さなければ

(60歳・専業主婦)

●地域(行政区)の納骨堂は、その管理が購入者たちに任されている。定期的な掃除などいろいろと面倒なことも多い。掃除に来ているのは皆高齢者で、今後の維持管理が難しくなるのは目に見えている

(63歳・公務員)

●私はおひとりさまなので、このまま死んだらたぶん実家の墓に入るのだろう。しかし、私は母、妹、弟と仲が悪く、今まで嫌な思いばかりしてきたので、本音では入りたくない。かと言って、個人でどこかの寺の墓に入るにしても、費用が足りず、悩ましい

(61歳・無職)

●父が他界した時、姉が「墓はあたしのものよ」と言ったので、任せることにした。ところが姉は、手続きを進めるうちに、「お墓の管理費って高いのね。やっぱりやめる」と。現在は母の所有になり、管理費は母のお金で賄われている。本人は認知症なので何もわからない。母が死んだら姉は管理できるのだろうか

(63歳・パート)

婦人公論ヒストリー

先祖代々の墓を拒む妻たち

近年、お墓に対する考え方がどんどん変化してきています。それは『婦人公論』の誌面にも明らかです。

「妻が嫁ぎ先の夫の先祖代々の墓に入るのが〝ジョーシキ〟と思われている世の中にあって、七割の妻が〝それはイヤだ〟と考えているとは、驚きです」と書かれたのは、1985年の記事「自分のお墓を持ちたがる女たち」(『婦人公論臨時増刊』)。なぜ、妻たちはお墓を買い求めるのか。『サンケイリビング新聞』で行ったアンケート調査の結果が紹介されました。

翌年の『婦人公論』でも、お墓に関するアンケートを実施しています。「調査報告 あなたお墓をどうします」(86年6月号)では、63%の女性が「先祖代々の墓に入りたくない」と回答。ところが、自ら買いたくても、値段が高すぎるという問題も。記事は「先祖代々の墓が核家族化してやがては消える方向にあるのは確か」だと結んでいます。

それから13年後の99年11月7日号では、「跡継ぎ不要の墓」として、永代供養墓の増加を報告(「自分のフィナーレは自分で決める」)。2015年3月24日号では、「墓じまい」が紹介されています(「『継がなくてもいい』永代供養墓が人気です」)。同年11月10日号のアンケートでは「入りたいお墓は?」という質問に対して、「1位 先祖代々の墓地(55人)/2位 永代供養墓・共同墓(36人)/3位 夫と2人で買った墓地(24人)」のほか、散骨(23人)や樹木葬(11人)などの新しい選択肢も散見されます(「ランキングで見る 理想の最期と私の準備」)。ついには24年6月号で「墓じまい、どうしてますか?」という特集も組まれました。

次々に〝ジョーシキ〟が更新されていくお墓事情。今後の変化にも注目です。

2015年の時点で、先祖代々のお墓を選ぶ人は3割以下に(『婦人公論』15年11月10日号)

次回は「家事、どうしていますか?」アンケートの回答をご紹介します

イラスト◎Nature illustrations by Storyset https://storyset.com/nature